

中国陝西省韓城地区の集落及び住宅に関する研究（2）

青木 正夫

キーワード：1）韓城地区，2）回族，3）単一寨，4）複数寨，5）共同寨，6）四合院住宅，7）複数間，8）上房，
9）廂房，10）地方性

1. はじめに

韓城地区には、かつて、村民が定住する村とは別に、一朝有事の際に敵の来襲を避け、逃げ込むための寨が設けられ、今でも70有余残存している。前回は、そのうち27箇所の現地踏査を経て、寨の実態把握と形成要因の把握に努めたが、その大半は中心地である韓城の周辺集落に限られていて、寨の全貌を明らかにするまでには至らなかった。今回は、韓城地区の全域を隈無く歩き、30箇所の寨を踏査した。地形的に比較的単純であった前回の調査地に比し、今回は山間部や溪谷部など地形的に複雑な地域が多く含まれていることから、多種多様な寨の存在を明らかにすることができた。中には、要塞と見紛う凄絶な寨も幾つか発見された。

今回の報告では、前回の調査と合わせて、当地区の寨が地理的、地形的、社会経済的条件に応じて如何に多種多様な構造と形態を成しているかを解明すると共に、典型事例をもとに各々の寨が果たしていた機能や沿革を探る。また、住宅の平面事例の採集も精力的に行い、前回提示した当地区における四合院住宅の地方性、および各住戸における平面構成原理と居住形式を明らかにする。

2. 調査概要

調査期間は1994年10月21日～11月4日。調査団は、日本側6人、中国側8人。調査対象地は、韓城地区全域の30箇所の村と寨のほか、比較のため隣接する山西省河津県および陝西省合陽県の数集落の調査を行った。韓城の位置を図2-1、調査集落の分布を図5-1に示す。



図2-1 韓城の位置

3. 清時代に寨造りを促した回族の侵攻

前報^{文1)}で示したように、明末以降、韓城地区において3回に亘り寨造りのブームが起こった。まず明末の李自成が指揮する農民蜂起軍の来襲時、次いで清の道光・咸豊時代に発生した太平天国の乱（1850～1864年）の時、そして清の同治6年（1867年）以来数年間に亘る回族の侵攻時である。中でも回族の来襲は、攻撃を受けた村の数および戦闘の残虐さにおいて群を抜き、韓城地区の住民を震撼とさせた。これに対して各村では襲撃に備えて既成の寨をより堅固に修築したり、寨を持たない村では急遽新たな寨の築造に努めた。

回族の来襲が残忍を極めたことは、次のような古老の言い伝えから推測できる。回族に占領された南龍亭村（南部地域）では、武器に成りうる包丁を10戸1組に1個しか渡さず、反逆の恐れに対して厳重な監視体制を敷いていた。その間、事ある度に村民を殺し、財を奪い、家屋に放火する（これを「三光作戦」という。光とは尽すという意味）といった残虐行為を行った。また、韓城の東南に位置する范村では、回族の襲撃を受けた際、村民は崖上の寨に逃げ込んだものの、防備の薄い谷側から徐々に攻められ、危険を感じた村民は手持ちの馬数頭の提供と交換に軍の撤退を申し入れた。交渉が成立したのち、馬の引取りに派遣された3人の回族兵士が、寨に入るやいなや村民を裏切って門を開き、全軍を引き入れた。村民は切り殺されたり崖から突き落とされ、建物は全て焼き尽くされたと言う。

このような数度に亘る回族の韓城地区への侵攻ルートは、「韓城市志」^{文2)}によると、回族の居住地である寧夏省から延安、宣川を通過し、北西側の県境にある神道嶺に駐留する防備軍を破り、渚水沿いの溪谷道を東に下り、韓城の真横に到達する経路であった。地区内に入ると南部の防衛拠点であった芝川城を陥落させ、さらに次々と各地の村を攻撃して回った。韓城での戦闘が一段落すると、黄河を東に渡って山西省に移動し、その後再び韓城に引き返し、戦闘を繰り返した。

伝聞によると、上記の西北ルートのほか、南西方面からの侵攻ルートもあったとのことであるが、文献には出てこない。神道嶺と共に南西部の沙鍋腦（位置不明）と

いう地点に防備軍を配置したもの、回族は神道峠方向に回り、防備が空振りに終わったとの記述がみえることから、やはり主要な侵攻ルートは西北ルートであった可能性が高い（図2-1）。

4. 寨の位置と規模

4.1 地形条件と寨の位置

寨は敵の襲撃に対して守り易い断崖絶壁の地を選んで築造された。そのことは、表4-2に示すように、寨の位置に関係無く、周囲が3方向あるいは4方向の谷で囲まれ、かつ村からみて崖上や崖縁に築かれた事例が多いことから明らかである。一方、村の近接地（300m未満）に築造されたものの中に、平地状の場所や、谷に接していても2方向止まりで、防御に不利な地形条件に甘んじているものも少なくない。これらは、村からある程度の範囲内で探しても地形的な適地が見つからず、むしろ逃げ込み易さを重視して村の至近場所の平地または小高い場所（準崖上）に築いたものと思われる。このように寨の位置は逃げ込み易さ（村からの距離）と守り易さ（地形）との適度なバランスの下に決定されていたといえよう。また、遠隔地の寨でも1km前後に集中していることからみると、この程度の距離が一応の許容限度とされ、

表4-2 村と寨間の距離、村と寨の位置関係、谷の数の相関

村と寨間の距離	地形からみた村と寨の位置関係					寨周囲の谷の数					合計
	平地	準崖上	崖上	孤島	崖縁	0	1	2	3	4	
隣接	2	4				2	1	3			6
300m未満	1	1	3	1	6	1	1	2	6	2	12
500m未満			3	1	2				5	1	6
1km未満			12	1	5				13	5	18
1km以上			4		6		1		6	3	10
合計	3	5	22	3	19	3	3	5	30	11	52

注1) 寨を持たない賈村、梁代村、相里堡、及び寨のみの具村、王峰村は集計から除外した（表4-3、表4-4も同様）

2) 共同寨の場合は、主要な村との関係について集計した

表4-3 村と寨間の距離

設置類型	単寨	複寨	共同寨	合計
距離(m)	27	6	31	64
0～	3	4	1	8
100～	3	2	1	6
200～	4	1		5
300～	3		2	5
400～	1		5	6
500～	4			4
600～	1		3	4
700～	2		4	6
800～	1			1
900～	2	5	2	9
1,000～	1	3	4	8
1,100～			1	1
1,200～		1		1
1,300～	2		8	10
合計	27	15	31	73

注1) 表4-2の注1)参照
2) 複数寨は「寨」の全数を、共同寨は「村」の全数を集計した

表4-4 寨の規模と地形（谷の数）

面積(m ²)	地形(谷の数)					合計
	0個	1個	2個	3個	4個	
5,000未満	1	1	6	5		13
5,000～		1	1	3	2	7
10,000～	1		3	1	2	7
15,000～			1	6	1	8
20,000～	1					1
25,000～						0
30,000～				1		1
35,000～				1		1
40,000～			1			1
45,000～						0
55,000～				1		1
不明		1	10	1		12
合計	3	3	5	30	11	52

注1) 表4-2の注1)参照

表4-1 設置個数、本村と寨の地形的位置関係および距離からみた寨の分類

設置個数	寨と本村保有型(本村側)				単一寨型				複数寨型				共同寨型			
	地形				非平地型				非平地型				非平地型			
	I. 平地型	II. 半島型	III. 準孤島型	IV. 孤島型	V. 平地型	VI. 準崖上型	VII. 崖上型	VIII. 孤島型	IX. 崖縁型	X. 平地型	XI. 準崖上型	XII. 崖上型	XIII. 孤島型	XIV. 崖縁型	XV. 準崖上型	XVI. 崖上型
A 寨非保有型(城壁村)	賈村 梁代村 仁義村#1 上寨村#1 高寨村#3	相里堡	具村#2	王峰村#2												
B 村寨隣接					孟家莊#3	西貢村			賈影村	西場村	漢南村		河西寨 3村共同 (現・南寨西村)			
C 村と寨は300m未満						張家莊	郭家村 柏香村	北寨村	張家堡 陳家堡 柳村 大陽堡				解家村		古城石寨 3村共同	永勝寨 9村共同
D 村と寨は500m未満							南陳村 卓立村 (南寨) 東趙莊		西影村						前溝村 石城村	中庵寺村
E 村と寨は1km未満							城古村 徐村 新莊村 楊村 郭家莊 桑莊村 花村		堡安村 杜家堡 白家溝				解家村		土砂村	周家堡 2村共同
F 村と寨は1km以上							西趙莊		大關村 南關李村				解家寨		辛莊村	辛莊村
I. II. III. IV. V. VI. VII. VIII. IX. 地形モデル (平面) (断面)																

注) 地形類型における「崖上」「崖縁」は、本村から寨を見た地形的位置関係を意味する。

その範囲内で地形的な適地が探索されたのではないかと推測される（表4-1，2）。

4.2 寨の設置数と位置

単一寨（1村1寨）の場合は，村と寨間の距離がごく短いものから遠方のものまで広く分布しており，特段の傾向はみられない（表4-3）。

複数寨（1村数寨）の場合は，近接地に2～3箇所の寨を持つもの（西塬村，澗南村），1km前後の場所に2～3箇所の寨を有するもの（薛村，姚庄村，三甲村），1つは近接地で他の1つは1km前後という組み合わせ（解家村）の3タイプに分類できる。解家村の場合は，最初に築いた寨（解老寨）が遠過ぎて不便なため，多少防備上不利である近接地に第2の寨（解家小寨）を増設した。なお，この解老寨には財宝の隠し場所があり，特殊な使われ方がされていたようである（写真4-1）。

共同寨（数村1寨）の場合は，寨に近く近い村どうしで共用するもの（土峪村・前湾村），遠方の村どうしで共用するもの（柳枝村・澗北村・澗家岭など），直近の村の寨を他の遠方の村が共用するもの（中寿寺村ほか8村）に区分される。中寿寺村（永勝寨）の場合は，中寿寺村以外の村からは2～3kmも離れているが，経済的条件や行政府の規制から自前の寨を持てなかった村が，やむなく遠方の寨を活用していた。しかし，これらの村の中には，裕福になると近接地でかつそれなりに険しい場所に専用寨を築造するものも現れた。一般的にみても，最初はこのように共同寨タイプが造られ，その後経済的条件の上昇に伴い単一寨あるいは複数寨が普及していったのではないかと考えられる。なお，複数寨および共同寨の出現理由については前報を参照のこと。

4.3 寨の規模

5千㎡未満の小規模タイプ，5千～2万㎡未満の中規模タイプ，2万㎡以上の大規模タイプに区分できる。全体的には中規模タイプが多数を占めている。地形との関連では，4方向谷の場合に小規模あるいは1万㎡未満の中規模タイプが多く，急峻な場所は必ずと面積に限られていることが分かる。また，平地，1方向谷，2方向谷

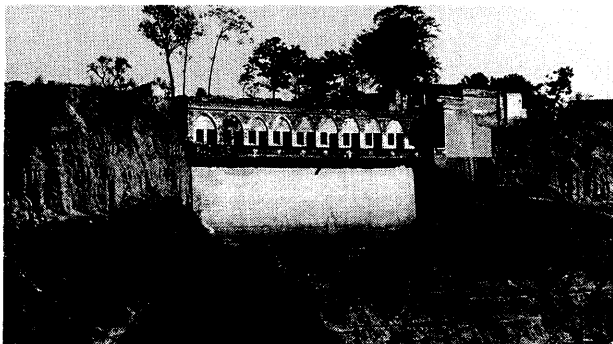


写真4-1 解老寨

といった地形的に恵まれていない寨も，守りやすくするため小振りのものが多い。なお，設置数との相関，村からの距離の相関は明確ではない（表4-4）。

5. 寨の地域分布

韓城地区は，北部山岳地域，西部山岳地域，北部地域（城北），中部地域（韓城），南部地域（城南）の5地区に区分される。寨を持つ村は全域に分布しているが，地域毎にその様相を異にする。それは，主として地形条件の違いに起因している（図5-1，2，3）。

北部山岳地域では，東西に流れる溪谷部のわずかな低地に位置する村が，両側の急峻な山の中腹や小台地上に寨を構築している。崖上型あるいは孤島型の寨である。孤島型の寨は，空に向かってそそり立ち，奇観を呈している（北寨村鳳凰寨・写真6-4参照）。かつては寨にも村民が常住していたが，現在では生活に不便なため放棄し，低地部の新村に移住しているものも多い。

西部山岳地域は渑水の支流沿いの地域で，寨の形態も現在の利用状況も北部山岳地域とほぼ同様である。（薛峰村古城寨・写真6-6参照）

北部地域では，黄河に面した河岸段丘の端部に崖縁型の寨，段丘中央部で小河川に侵食されてできた低地部の村では，その後背の高台端部に崖上型の寨（党家村・写真6-1参照），段丘中央部の起伏が緩い地域では平地型あるいは準崖上型の寨（西塬村・図6-3参照），西側の山麓の地域では，山の中腹に崖上型の寨（柳枝村）があり，複雑な地形に応じて多様な寨が築かれている。また，現在でも村民が常住し活用されている寨が多い。なお，柳枝村には，寨までの距離が1.3kmと遠いため，ある地主は一族の住む本村の一面を高壁，門，望楼等で独自に防備を固めた事例がみられる（写真5-1）。

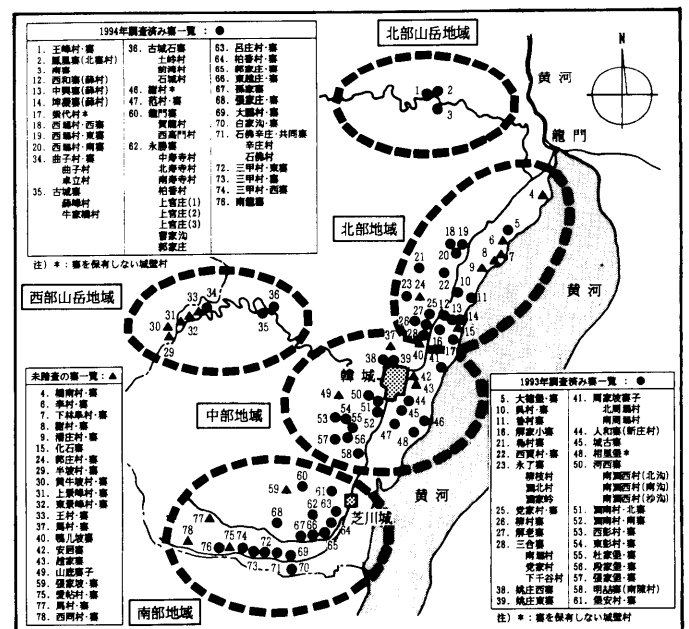


図5-1 寨の分布と調査地

中部地域では、涪水の侵食平野（韓城を含む）をコの字型に取り囲む台地の端部に涪水を望むように点々と寨が並ぶが、村が平野部にある場合は崖上型の寨（城古村保定寨）、村が台地上にある場合は崖縁型の寨（段家堡、東彭村・図6-2、写真6-3）となる。このほか台地中央部の起伏の少ない場所では準崖上型の寨（澗南村）も散見される。現在でも常住している寨が大半である。

南部地域では、東西に流れる芝水を挟む北側と南側の高台に寨が線状に並ぶ。北側は、芝水沿いの低地に位置する村の崖上型の寨、南側は、台地中央の幹線道路沿いに点在する村の崖縁型の寨である。また、北側台地にも



写真5-1 柳枝村の地主の望楼

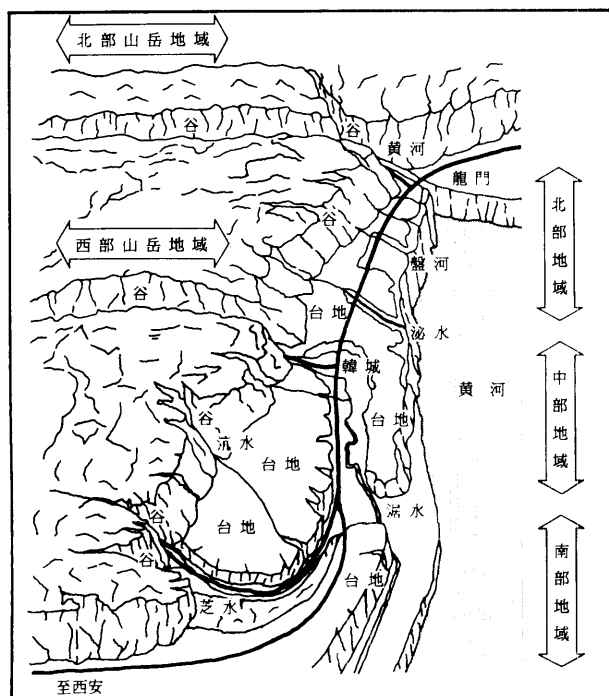


図5-2 韓城の地形略図

小河川によって侵食された断崖端部に崖縁型の寨（寿寺村）がみられる。

6. 寨の典型事例

以下に、韓城地区を代表する寨の典型事例を紹介するが、選定にあたっては、①設置数類型、②本村と寨の地形的位置関係、③地域性を特に勘案し、さらに、④本村と寨間の距離、⑤設置年代違いを加味した。

6.1 党家村・泌陽堡（単一寨、崖上型、北部地域）

元朝時代、泌水沿いの丘陵地の崖下にヤオトンによる集落を築いた党家村は、明末（1600年代の中期）李自成による農民蜂起の頃、南塬村、下干谷村と共同で寨（三合寨）を建造した。しかしこれが村からやや遠く、その後村が裕福になったことや、折からの太平天国の乱（1850～1864年）に備えて村の北側の台地上に単独で寨を新設した。村内で発見された碑文「新築陽堡碑記および合堡甲牌碑記」によると、33戸が金を出し合い、3年間をかけて清・咸豊6年（1856年）に完成した。面積は18,500㎡で中規模クラスである。3方向が谷に囲まれ、残り1方向は台地に繋がっている。この方向からの襲撃に備えて版築による8～10mの城壁を築き、谷の方に向かって徐々に高さを減じ、チリトリ型の形状を成す。出入りは崖下の村からのトンネルによる。寨内の道路網は梯子型で、かつ城壁に沿って周回道路を持つ。寨内の住宅は非常時用、本村の住宅は平常時用に使い分けられていたが、現在では本村の住宅と関係なく常住している。太平軍や回族の来襲は実際には経験しなかったが、民国18年（1929年）に土匪の襲撃を被っている。この党家村は、本村、寨共に保存状態が良く、伝統民居保存地区に指定されている（図6-1、写真6-1、2）。

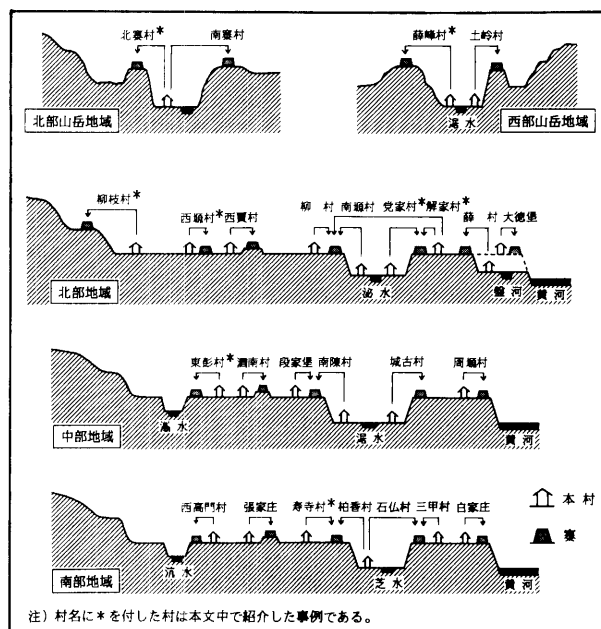


図5-3 地域別・村と寨の地形的位置関係

注）村名に*を付した村は本文中で紹介した事例である。

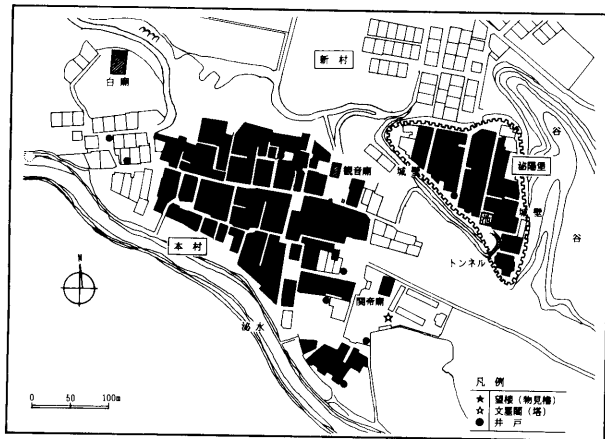


図 6-1 党家村の配置図

6.2 東彭村寨（単一寨，崖縁型，中部地域）

この寨は本村に居住していた3家の地主によって築造された。面積11,400㎡で比較的小振りである。小高い台地上に位置する村に隣接し、北と東の2方向が谷に面する場所に寨がある。南側は谷の代わりに幅20m 深さ約5mの人工的な壕を掘り、防備を固めている。西側は門を介して本村に繋がる。城壁は大半が崩れているので往時の姿は定かではないが、谷に面する部分が少ないため全方向とも城壁が高いコップ型の形状を成していたと推測される。道路網は魚骨型を成し、周回道路を持つ。3家の地主によって建設され住宅は南院、東院、西院と呼ばれ、それぞれ多層形式による大規模なものであった。清・同治6年(1867年)には東彭村一帯を回族が襲ったが、有事の際には地主以外の村民全員も寨に逃げ込んだ(図6-2、写真6-3)。

6.3 北寨村・鳳凰寨（単一寨，孤島型，北部山岳地域）

絶壁の上にそそり立ち、周囲を圧倒しているこの寨は、明代以来長らく山の中腹にヤオトン集落を形成していた北寨村の寨である。築造時期は不明であるが、清・光緒10年(1884年)に修築されている。面積は2,200㎡と極めて小規模である。その狭い頂上部分はもとよりその側面にも石積みによるヤオトン型の住宅が30戸ほどびっしり張り付いている。またその足元も崩壊ないように石積みで補強され、あたかも要塞の如くである。頂上部分を囲う城壁はない。道路網は魚骨型に近く、頂上より一段低い位置に周回道路が回っていた。寨への出入りはトンネルである。1965年まで村民が常住していたが、その後崖下の新村に全員移住し、今では廃墟となっている。寨内には池も井戸も無く、往時は1週間分程度の水を貯水して生活用水としていたとのことである。山岳地域の地形的特色を反映した典型的な寨である(写真6-4)。

6.4 西塬村・鳳翼砦（複数寨，平地型，北部地域）

西塬村には東寨、西寨、南寨の3つの寨がある。3つ

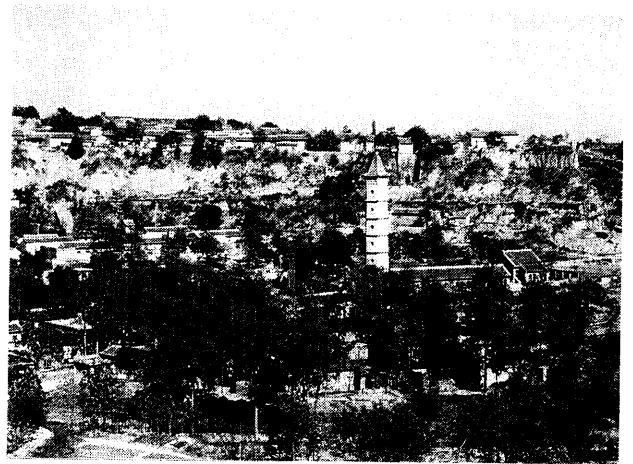


写真 6-1 党家村・本村と寨の全景



写真 6-2 党家村・チリトリ型城壁

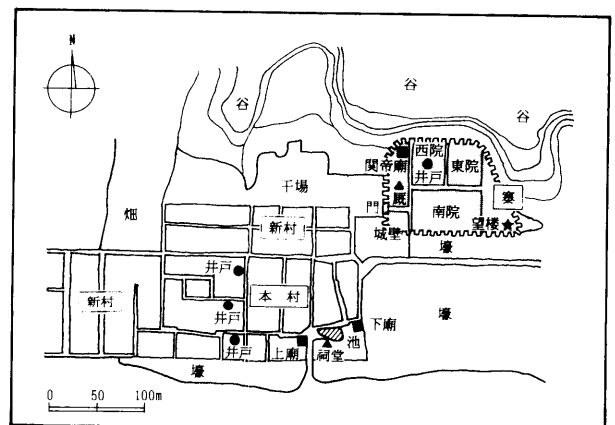


図 6-2 東彭村の配置図

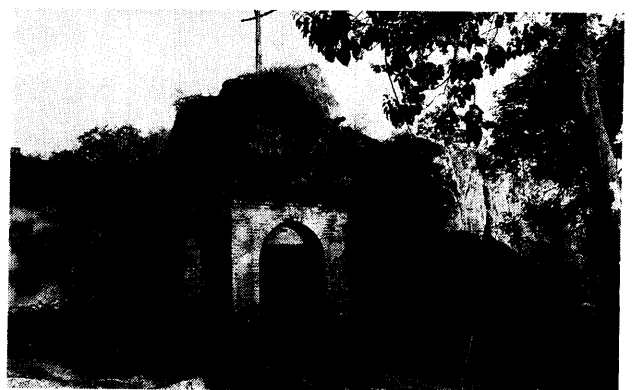


写真 6-3 東彭村・城壁と門

を合わせて鳳翼岩と呼ぶが、由来は、本村を鳳凰の胴体、東寨を頭、西寨と南寨を翼と見立てての形容である。3つの寨が必要であったのは、本村の規模が大きく(831戸)1つでは足りなかったことに加えて、張家、吉家、程家という村の三大姓に応じて逃げ込む場所も分けたためである。東寨(張)4,300㎡、南寨(吉)10,450㎡、西寨(程)21,600㎡という規模の違いは、それぞれの姓の村民数を反映したものである。因に、本村も姓に応じて居住区が分けられており、張家は1~2隊、吉家は3~5隊、程家は6~9隊である。「韓城市志」によると、明・崇禎8年(1635年)、李自成軍と戦闘を交えたことが記されているが、当初は東寨と西寨しかなかった。後年、回族の襲撃(1867~1869年)に遭った際、全員を収容できなかった経験から南寨を増設した。その完成は、「創建鳳翼寨碑記」によると、清・同治10年(1871年)である。計画当時の図面も残されている(写真6-5)。3つの寨全てが守りにくい平地型であるが、この一帯は平原地帯で、村から多少離れた場所でも険しい地形に恵まれず、やむなく逃げ込みやすさを優先して村から至近距離に築造したようである。道路網は、東寨と西寨は魚骨型であるが、南寨は梯子型である。城壁は完全なるコップ型で、周囲に人工的な壕が施されている。出入りはそれぞれ1つずつの門に限られていた。現在も多くの住民が住み、本村と一体化している(図6-3)。

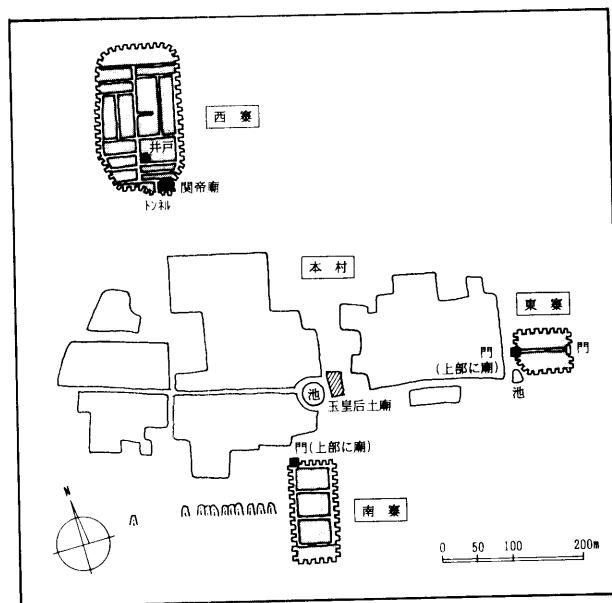


図6-3 西塬村の配置図

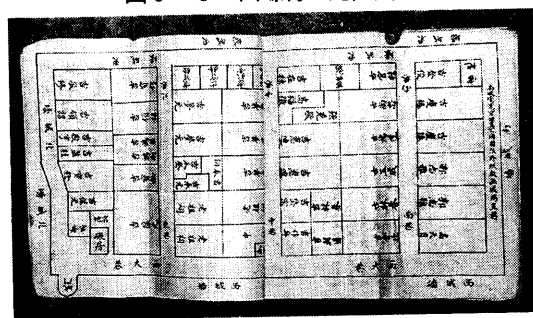


写真6-5 西塬村南寨の古図面

6.5 薛峰村・古城寨(共同寨, 孤島型, 西部山岳地域)

渚水が大きく蛇行し、取り残された孤島状の頂上に築

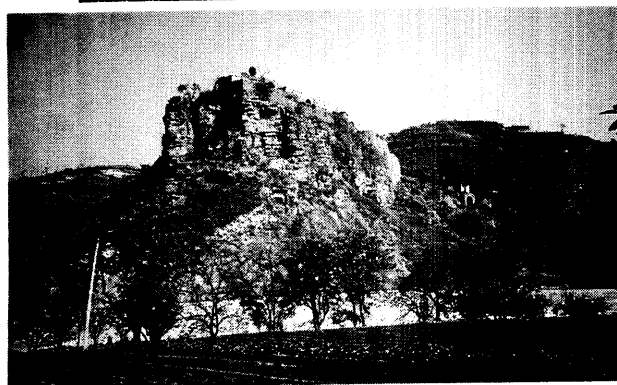
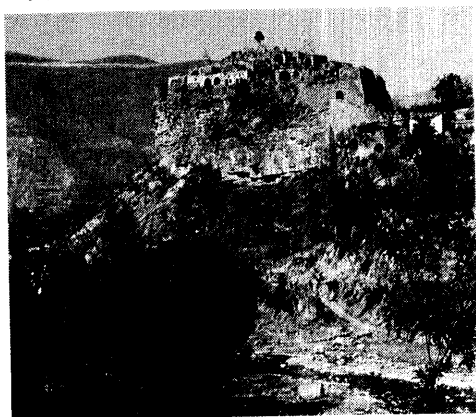


写真6-4 北寨村鳳凰寨

かれたこの寨は、名前のとおり当初は隋時代の軍の駐屯地であり、交通の要衝であるこの地において川沿いの道の人馬の往来を山頂から監視していた。また、この村は元時代(1265~1269年)に一時的に韓城の県治(行政府)が置かれていた所でもある。その後、時期は不明であるが、数百m離れた薛峰村および牛家橋村の共同寨として活用されるようになった。山自体はかなり広いが、頂上の寨は3,900㎡とコンパクトである。近くに他の3村の共同寨(古城石寨)もあり、現在の合村名をとって、土峪東寨、土峪西寨と呼び分けられている。古来より要

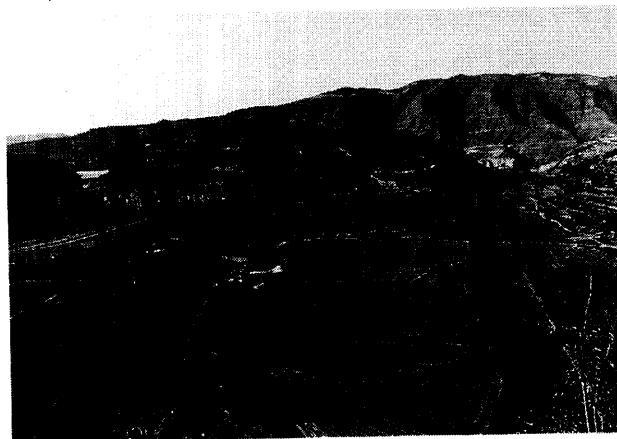


写真6-6 薛峰村古城寨

衝であったことから、明末の農民蜂起軍、清時代の回族蜂起軍および民国時代の土匪に幾度か襲撃掠奪を受けている（写真6-6）。

6.6 寿寺村・永勝寨（共同寨，崖縁型，南部地域）

当寨は、前述したように、同じ台地上の至近距離にある中寿寺村、北寿寺村、南寿寺村のほか、遠方の他6村計9村の共同寨であった。規模は、43,900㎡で最大級である。3方向が谷に面し、チリトリ型の城壁をもつ。寨内には民家もあったようであるが、多くは崖の小段丘を利用したヤオトンで済ましていた（写真6-7）。あくまで臨時の逃避場所の色彩が強く、かなり原始的な寨の様相をとどめている。

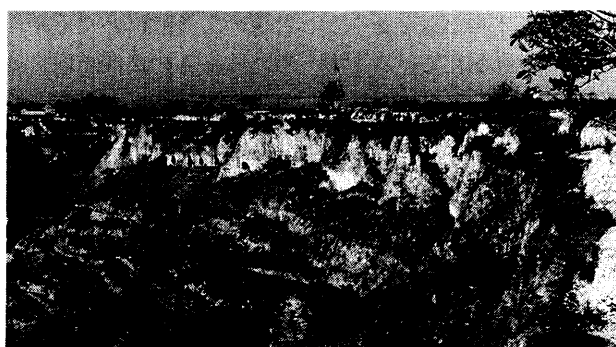


写真6-7 寿寺村永勝寨

7. 寨を持たない城壁村

中部地域で黄河沿いの河岸段丘の端部に位置する謝村には寨はなく、村自体が高い城壁で囲まれている。寨を持つ村が一般的であった韓城地区にあって、あえて逃げ込むための寨を設けなかったのは、寨に適した場所が近接地に得られず、やむなく村自体で防御する方針をとったとも考えられるが、一説によると、この村には政府の役人が居住しており、その保全のためにこのような方法をとったとも言われており、特別の要因が働いていた可能性が高い。因に、城壁村のことをこの地域では「堡」と呼ぶ習わしがあるとのことであるが、堡はかつて地域防衛の拠点であったと考えられ、そのような重要な集落全体を城壁で囲ったと推測できなくもない。相里堡、堡安村、張家堡、杜家堡、大德堡など、村名に堡が付く他の村に、別に寨は持っていない、村自体も城壁で囲み城壁村のような様相をみせている事例が多いことはその証左ではなかろうか。そう考えると、城壁村は寨よりも年代的に古い形式である可能性もある。ただ、この城壁が村の生成と同時に計画的に造られたものではなく、後年、ある必要に迫られて造られたことは、城壁の位置が平面的にみて極めて不規則で、所々雁行していることから推測できる（図7-1）。なお隣接する山西省河津県では城壁村型の村が散見されるのみで、寨を持つ事例はみられない。

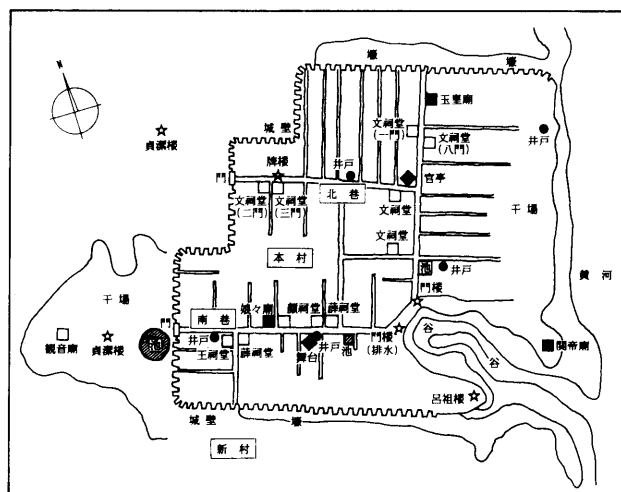


図7-1 謝村の配置図

8. 四合院住宅の平面構成

8.1 考察の対象

今回の2次調査において採取した詳細プランは、山西省稷山県の4例を含め36例である。また、当地で党家村と並び富裕な集落とされる東彭村（本村）において、古くから残されている四合院の全てについての概略プラン12例（これに前述の詳細プラン5例を加えると17例）を採取した。前年の1次調査15例および党家村調査事例9例^{文3)}を併せて考察を行う。

8.2 本村と寨における住宅の相同性

元来一過的な居住機能の要請から発生した寨における住戸は、一般的には本村に比べ小規模であるが、一方で防御性の高さから地主層ではむしろ大規模のものを建設している場合もある。その平面構成および住まい方においては本村の住戸との相違点は認められない（図8-1）。従って以後の考察は本村と寨の住居を区別することなく扱う。

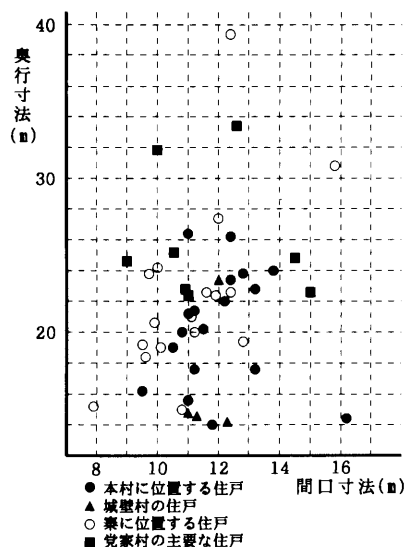


図8-1 対象住戸規模比較図

8.3 平面構成の形態論的特徴

住戸配置は、南入りで上房を北に持つ「座北朝南」が基本で6割強を占める。また、東西軸の配置である「座西朝東」「座東朝西」が3割弱みられる。

上房・門房は奇数間口で、門房が間口5間が支配的な
のに対し、上房は3間が中心である。また、上房は1室
型で、間仕切り化は近年（主に解放後）改修による。

これに対して、^{しょうぼう}廂房の形態は実に多様である。2間1室型から8間4室型までが確認され、しかも偶数間口の方が多数を占める。奇数原則の既往学説とは、全く異なった傾向を示している。このうち主流は、4間であり3間がこれに続く。

廂房 3 間の場合、1 室型とともに 2 室型の例も多く見られるが、やはり「一明両暗」は見い出せない（調査対象選定時に、「一明両暗」の存在を執拗に探查したが、存在は確認されなかったことも付記する）。

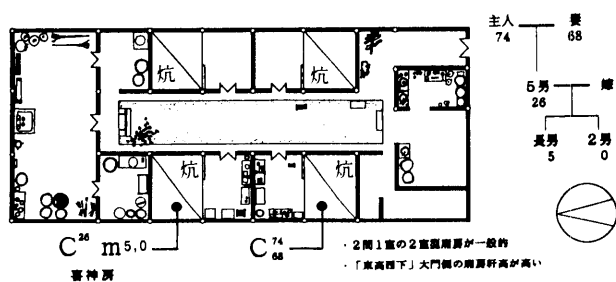


図8-2 廂房4間2室の事例（簪村寨・賈高荷宅）

廂房4間の場合は、殆どが2間+2間の2室型である。また、開口部（扉）の位置関係についても、必ずしも対称性が意識されておらず、様々な配置が存在する。

これらのことから、2間1室が平面構成の基本単位となっていると考えられ、廂房2間1室型が当該地方における四合院の最小のものと位置づけられる。これにもう一方の主流である3間1室のパターンが加わり、さらに開口部のとられ方によって多岐にわたるプランタイプが生み出される結果となっている。従って、廂房5間以上の事例は、廂房4間までに現れるパターンの組み合わせによって構成されていると見るができる。

すなわち、本村も含め防衛のための稠密^{ちゆうみつ}な集落居住を前提としながら、敷地規模に応じて臥室数を確保する志向から、2間1室を基本とした極めて多岐にわたる平面構成が実現されていると考えられる。この2間1室で就寝はもちろん室内における行為の全てが行なわれる。時には炊事・食事も行っている(図8-2, 3)。

8.4 居住形式の特徴

(1) 儀式・接客

冠婚葬祭および接客は、1室型の上房で行われることが大きな特徴である。多人数接客時には院子まで拡張して利用される。現在日常的には倉庫化しているものが多いが、正面の壁面には祖先を祭るための「祭祖牌位」が設えられているのが一般的である。経済的要因により建材売却のために撤去した例も数多く、これは最も高価に建てられていたことの証左である。また、慣習の希薄

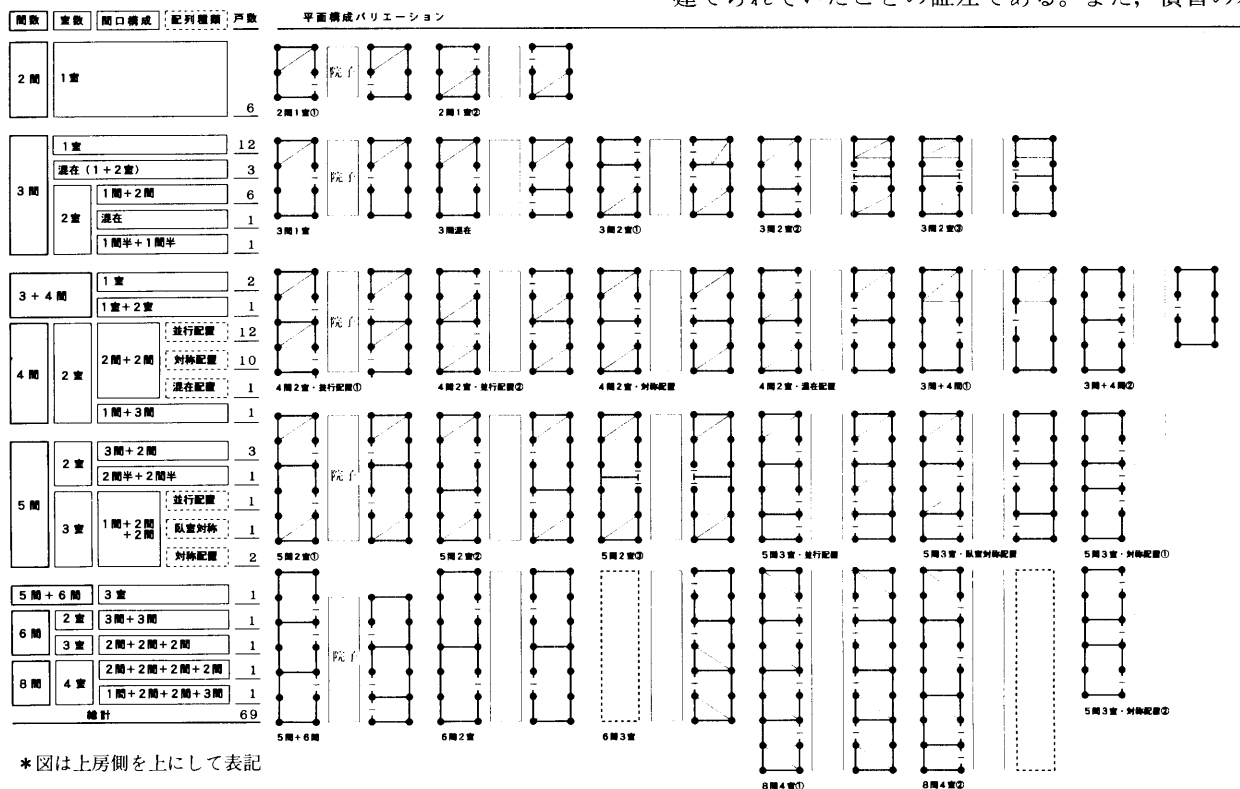


図 8-3 廂房平面構成モデル図

化・格式性の低下、元来臥室として使用されず生活上の実害が少ないことなどもその理由として挙げられる。間仕切りの設置・臥室化は近年改修の事例である。

(2) 臥室の序列

①門房の優位性

慣習として臥室の序列が保たれている住戸では、年長者（または主人）の門房での起居が支配的である。この点においても、門房に使用人の室が充てられ、主人は「上」の方に起居するというこれまでの研究成果による四合院の居住形態とは好対照の実態が指摘される。

その理由として、女性の家族を監視する目的、また接道面という防御上の目的といった機能的要請によるもの、あるいは、方位による序列の原則としての「兄南弟北」により、決定されることなどが挙げられる。「座北朝南」を基本とすると、上位の南は門房にあたる。上は「賓」下は「主」という表現も用いられている。

門房にあたる棟を「上房」と称している事例<潤南北寨>や「主房」と呼ぶ事例<東彭村>も確認された。

この点に関しては、山西省の6例が対比的な傾向を示している。上房の撤去された1例の過去の住まい方を含め全数が上房に臥室を持っており、3例が年長者の起居する房であると位置づけられている。採取戸数が少ないので断定はできないものの顕著な差異を示している。

②廂房の序列

廂房の序列の確認される21例については、典型となる法則性は認められず、複数の原則の存在が考えられる。

1)「兄東弟西」の原則

廂房の臥室の序列で主流とみられるのが「兄東弟西」の考え方である。ほかに「東高西下」の表現も使われている。座北朝南の事例が殆どであるが、座南朝北の1例においてもこの原則が伝えられている。さらに東廂房のみを2階建てにし、形態的にも優位性を演出している事例もある。これに前述の「兄南弟北」の原則を合わせると、東廂房の門房側の臥室から序列化される。この原則に符合するものが最も多い。

2)「兄左弟右」の原則

方位に関わらず、上房を背に左側の廂房を優位とする住まい方の事例も確認される。座北朝南の場合「兄東弟西」の原則と合致するが、座南朝北やそれ以外の配置でもこの法則性に符合するものが5例存在する。座西朝東の場合、上位となる廂房は南面居室となり、4)に述べる方位による優位性も合わせ持つことになる。

3)「喜神房」

一般的に老夫婦（＝主人）の次の序列として、上房を背に右廂房の手前の室を「喜神房」と称し、子室に恵まれる室として若夫婦の臥室とする住まい方も見られる。呼称の確認はされなかったが同じ原則で序列化されているもの（3例）を含めて5例が該当する。

4) 居室環境によるプライオリティ（南面居室の優位性）

前述の3つの原則には当てはまらず、方位によってのみ解釈が可能なものが1例見られた。2)に当てはまる事例のうち座西朝東配置の例などを含めると6例が、南面居室の廂房を上位としている。

現在、序列の原則が保たれていない事例が極めて多い。格式性や慣習が希薄化し後継世代に継承されないこと、就業・就学形態の変容により平日別居化の進行、独立・分家の際の四合院の区分所有など、法則性維持の困難な状況が多く発生していることが指摘できる。

③厨房の配置

厨房は、大門近傍の廂房に間口2間の規模で設けられている事例や門房設置のものから、廂房と他のいずれかの棟の残余空間での簡易設置のものまで様々で特定できない。増改築における厨房の更新の例がかなりみられる（図8-4、5）。

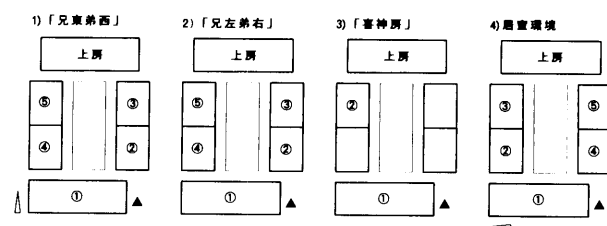


図8-4 臥室の序列モデル図

8.5 特定集落における平面構成特筆事項の検証（東彭村の場合）

上述の特徴を検証するため、古くから富裕な集落の一つである東彭村において、少なくとも50年以上経過していると推察される採取可能な住戸平面21例（本村：17例・寨：4例）を採取した（図8-6）。東彭村は、韓城市夏陽郷西4km、205世帯・人口769人の集落で、本村と寨が隣接しており、限られた地主層はむしろ寨に比較的大規模な居を構えている。当地においても、平日は家族ごと市街地で就業し、週末のみ帰宅する世帯もある。

上房撤去の事例が多いが、間口は3間が中心であり、門房においては、やはり5間を主流に3間が混在する。

廂房は、4間2室型が約半数を占めるが、対称配置と並行配置に分かれる。間口3間の場合1室型とともに1間+2間の2室型が多く存在する。特異な例として、5間+6間3室あるいは6間3室も確認された。いずれも、臥室は2間1室が基本となっており、また同一集落においても多様な廂房の類型が見られた。

8.6 総括

韓城地区周辺四合院住宅においては、殊にその廂房の平面構成において多様なタイプが存在しており、また廂房4間2室を主流として偶数間口が奇数間口に比べてより多く存在している。その臥室の基本単位は2間1室であり、3間の事例においても「一明両暗」は存在しな

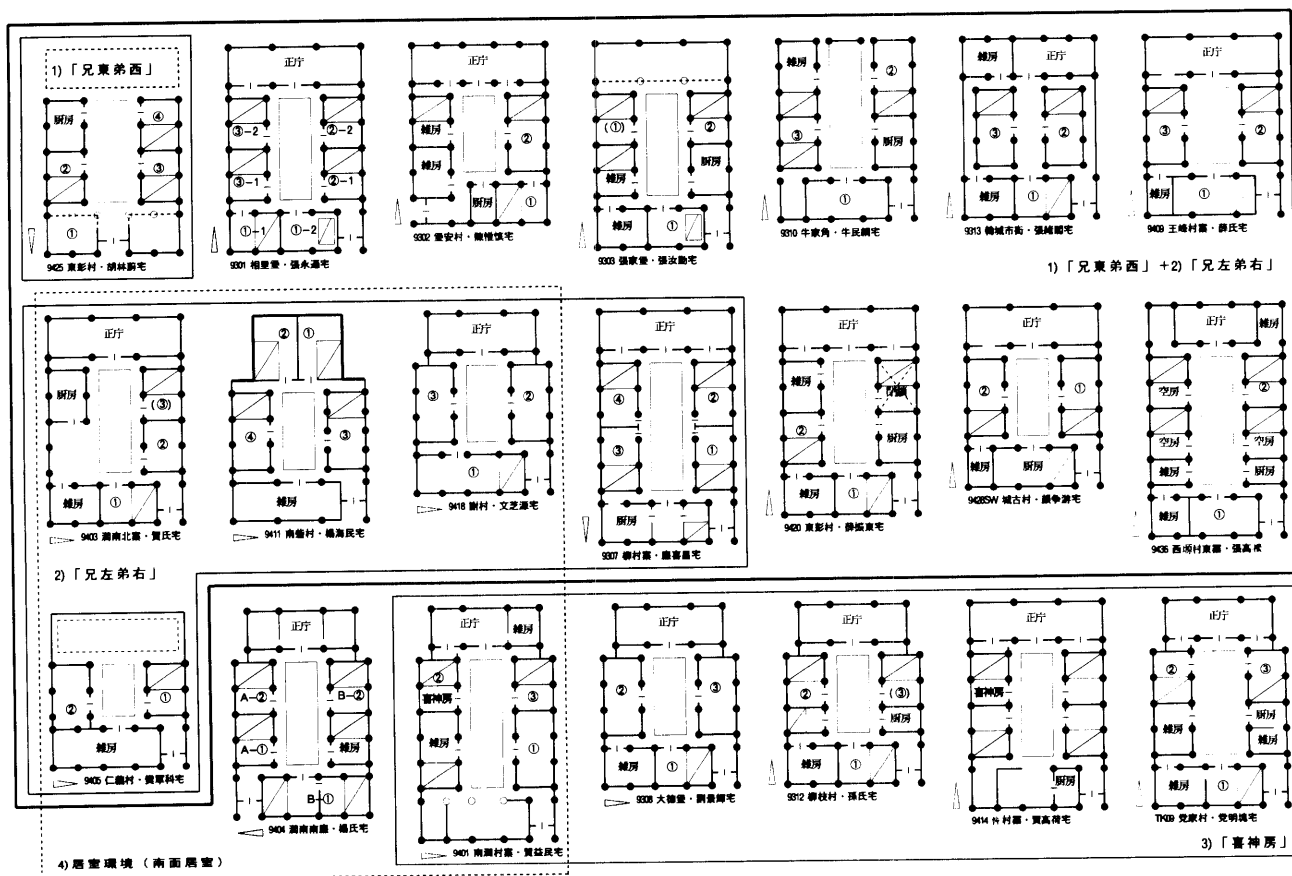


図8-5 臥室序列の実例

い。すなわち、基本単位が機能分化していないのが特徴である。対象地区あるいは西安近郊地区においても、簡素な2間1室の建造物（これだけで1軒の住宅の場合もある）が現在でも数多く建設されており、規模の大きなものは基本単位を連結した形態である。

これに対し、「一明両暗」は、3間の基本単位が堂屋と臥室に機能分化しているのが代表的なものであり、また「中国居住建築簡史」^{文4)}において漢時代の住宅として紹介されている「一堂二内」の平面構成は、2間四方の住居が堂屋と2つの居室（内）に分けられたものである（図8-7）。この2間1室型の基本単位がこの地方に存在する理由として、現在のところヤオトンとの関連を重視している。ヤオトンの住い方との類似性だけでは

なく、現在判明している地域分布が黄土地帯とほぼ一致するからである。

このほか上房は1室型で、冠婚葬祭・接客のための棟として臥室化されず、年長者は倒座の門房に起居することなども、既往説とは相反する居住形式である。また、廂房の臥室の序列には複数の原則の存在が確認された。

以上が対象地域における四合院住宅平面構成の特殊性として挙げられる。

9. 補 足

この研究はまだ未解決の問題を多く残している。その一つは「逃げるための寨」と「廂房臥室・直入り・1室型」の地域分布をとらえることである。特に後者は地域分布が判ることによって、「一明両暗」型とは異なる発展過程を経たものであることが判るのではないかと推測を持っている。ただ中国国土は広く、未開放地区が多々あることから調査そのものが容易ではない（この度の調査でも西安建築科技大学に多大な迷惑をかけることになった）。可能な限りとらえるために今年9月14日より28日まで補足調査を行った。先の調査時には時間的制約のために断念した地域についてである。

調査地域は西安市を中心として東西南北80km圏内と成都市周辺40km圏域と隆昌市を中心とする40km圏内である。

西安地域では現在の戸数51戸から200戸の集落が最も

間数	室数	間口構成	配列種類	戸数
3 間	1 室			3
	混在 (1 + 2 室)			1
	2 室	1 間 + 2 間		4
4 間	2 室	2 間 + 2 間	並行配置	4
			対称配置	1
			混在配置	5
			1 間 + 3 間	1
		5 間 + 6 間		3 室
6 間	3 室	2 間 + 2 間 + 2 間		1
総 計				21

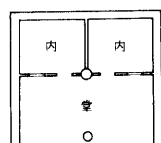


図8-7 「一堂二内」^{文4)}

図8-6 東彭村の
廂房平面構成

多く、殆ど全ての村が塊状村である（表9-1）。寨と堡のつく村がかなりの数あるが、地形は全く同様で隣り合わせの場合も多く、その区別は全く不明である。韓城地区有識者の「地形による」との説はこの地域では通用しない。民国以前に作られた村、即ち殆どの村が城壁に囲まれ、逃げるための寨は全くなかった。城壁の建設年代は古いもので明時代、多くは清時代に作られている。解放後、特に人民公社建設時、無用の長物化して壊されている。建築材料として、また肥料としても用いられ、また人口増と核家族化によって村域が拡大したことから、今は痕跡すら残っていない。

ヒアリングにより多くの村落の城壁をとらえることが出来たが、その中で特徴的な城壁村を2例あげておく。

図9-1は西安南々西24kmの下樑村で孤状の城壁で亀の形を模したものと思われる。何曉昕著の『風水探源』の中にも中国では亀の形は愛好され、その例として南宋の平江城が挙げられている。形にこだわったため城内南東部には空地（畑）が多かったといわれている。この地域では唯一の北城門が残っている。城壁は高さ10m、上部幅員は2mであった。城壁外には幅4m深さ3mの壕がめぐられ、城壁内には城壁に沿って歩ける程度のスペースがあった。

図9-2は西安南西30kmの方家寨の復原図である。多くの城壁村が自然村に後から城壁を築いているのに対し、この村は計画的に作られたと思われる珍しい例である。規模は極めて小さい。門は南門一つで、大きい道路は中央部の中巷と城壁の内側に沿った2本の計3本で道幅は1.2~1.5mであった。その他小道が1本あった。敷地割りには間口3丈で、住宅は全て東向きで、南北西向きは1軒もなく、入口は全て東よりで、合計27戸分の敷地があったが空地もあった。四合院の住宅はなく、井戸は各戸にあった。方氏、石氏、劉氏の三氏が住んでいたが祠堂は劉家のものだけで、方家、石家のものはなかった。城壁は高さ4m、上部幅員は1.5~2.0mで周囲には幅3mの環壕があった。

その他では、かつて解放前には城壁内の全戸が下沈式ヤオトンで現在も5戸残っている小道口寨など特徴のある城壁村もあった。また、この地域の城壁の多くは高さ

が4mと低く、特に東北部の多くの城壁村は回族や土匪に侵入され、家も焼かれて無人の時代があり、現在住んでいる人はその空地に入り込んで5~6代になる家族が住んでいる例が多く、古い時代のことは不明であった。

この地域の農村住宅は、正庁のある住宅は非常に少なく、廂房は全て直入り・1室型であり、臥室では全戸、炕を備えていた。

四川省に逃げるための寨があるとの情報（中国側の一週間に及ぶ予備調査の結果）と陝西省の隣りの省であることから廂房臥室・直入り・1室型の分布をとらえるために調査を行った。成都周辺及び成都から東220kmの高速道路沿いの集落は全て散村で、大きい集落でも10戸程度で解放前にも城壁はなかった。

成都から東220kmの隆昌県にはかつて城壁村が6箇所あったとされている。その1箇所の福慶寨（隆昌市西南30km）を調査したが、その村のみ塊村で周りは全て散村であった。何故この村のみ塊村で城壁を持っていたのかは、解放前の住人は殆ど全て他に移住しているため不明であった。

逃げるための寨は隆昌市西南40kmの雲頂郷に唯一存在した。しかし、この雲頂寨は韓城地区の寨とは性格が異なり、郭一族のための特殊な寨といえる。上層部の県側からは未開放地であることからおとがめを受けたが、郷からは大歓迎を受け十分調査が出来、研究対象としては大変興味ある結果を得たが、主題とは離れるため簡単に述べるに留める。

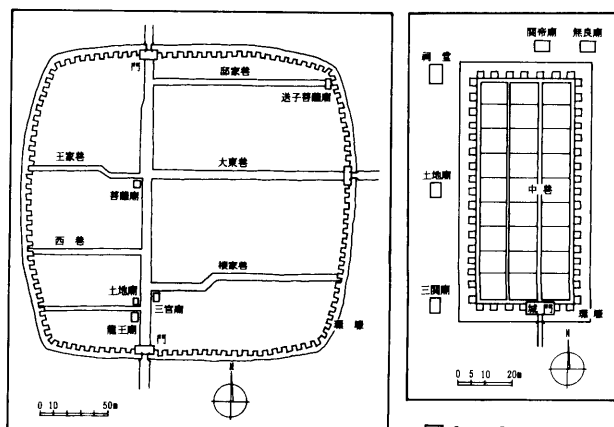


図9-1 下樑村配置図

図9-2 方家寨復元図

表9-1 西安市域内の集落諸相

区 名	合 計	通 名 類 型						得 名 原 因							戸 数				初 建 年 代										未 包 括 片 村
		村	庄	寨	堡	坡 溝 溝 灘	街 巷 其 它	姓 氏	歷 史 村 史	地 理 實 體	祈 愿	職 業 特 產	方 位 序 數	建 筑 單 位	50 以 下	51 200	201 500	501 以 上	解 放 後	民 國	清	明	元	宗	隋 唐	漢	周 秦		
灊池	424	166	36	18	18	72	114	198	44	38	32	20	55	37	121	250	50	3	9	15	203	99	7	18	42	26	5	19	
未央	291	112	19	35	36	14	75	158	39	28	7	4	8	47	29	225	36	1	1	2	120	151	13	3	1	0	0	10	
雁塔	158	43	18	27	13	9	48	49	15	26	7	1	20	40	15	100	39	4	0	3	47	41	9	7	44	4	3	7	
蘭良	36	20	0	0	0	1	15	10	3	8	2	4	8	1	18	18	0	0	0	2	29	4	0	0	1	0	0	2	
合計	909	341	73	80	67	96	252	415	101	100	48	29	91	125	183	593	125	8	10	22	399	295	29	28	88	30	8	38	

出展：西安市誌

郭一族は明時代より四川省一の大富豪であった。清末、最盛期には一族の所有地は3県にまたがり、10万畝（1畝660㎡）、田租収入は9万7千余石に達し、48の大規模の莊院を擁し、1947年には族人は約2,500人で、雲頂国といわれていた。

最初に作られた寨は逃げるための寨であった。万暦年間（1573～1620年）世情が不穏となり、比高100m余の雲頂山の稜線の元々小屋を作っていたところに高さ数尺の石を積んで200畝の面積の寨を造っている。しかし、明末の1644年、張獻忠らの乱により族の主だった9人が殺され、他の一族は貴州に逃避している。乱が治まって9家長とその家族が再び帰って来て、清時代に入り益々の隆昌発展を遂げている。その後、李永和が反清農民軍を組織して雲南から四川に入って来たため、咸豊9年（1859年）銀子2万両余を投じて寨の拡大・修復を行っている。更に光緒20年（1894年）19世郭書池が湖北督糧道致官をやめ郷に帰り、寨が頑丈さと美しさに欠けるとして、2万余両を資金として、農民300人を招き2～3年をかけて城壁を高くし面積を広げたのが現在の寨である。寨の周長は1,640m、城壁低部の幅員約6m、上部の平均幅員4.2m、高さ平均5.2m、中に土を詰め両側を石積みした堅固な寨である。解放前には豪莊な庄院が54戸、その他薬屋、豆腐屋、包子屋などもあり、最も多い時には兵300人もおり、人口1,244人、合計179戸の住宅があった。48の庄院の家長は夏の避暑地として使っていたが、最も遠い庄院は10数kmの処にあることから、逃げるための寨としては急場には役に立たず次第に常住し、連日宴会と麻雀に明け暮れ、享樂の地と化していた。沢山の豪華な骨董品や書画がこの寨におかれており、大觀園（紅樓夢）以上であったといわれている。従って、農民兵にしばしば襲われたが、一度も破れなかった。襲われても全寨の人の一年分の食糧は確保されていた。また寨内から石炭が産出されることから、3年間は持ちこたえることが出来たといわれている。この他寨外に門前街が形成され、3・6・9のつく日に夜市が開かれ、この地域の商業的中心をなしていた⁵⁾。

四川省の調査範囲内の住宅の基本単位の平面構成は「一明兩暗」である。1棟の農村住宅では解放前のものは堂屋の扉のみで房屋は勿論全て壁であった。60年代に房屋に格子だけの明り窓を設け、80年代にガラス窓となり、堂屋の扉の上にもガラスの小窓を設けている。4～5年前から堂屋の扉の両側に縦長の小窓を設けるようになった。カマドは堂屋の中に設け、炕は全くなく寝台を使用している。ただ三合院になると、正庁は一明兩暗であるが、廂房の寝室は直入り一室型の注目すべき平面構成の住宅があった。

謝 辞

最後に、調査対象とした中国各地の多くの農民住宅の方々に感謝致します。

<参考文献>

- 1) 青木正夫他：中国陝西省韓城地区の集落及び住宅に関する研究（1）、研究年報、No21、pp.145～156、住宅総合研究財団、1995.3
- 2) 韓城市誌編集委員会：韓城市志、三秦出版社、1994
- 3) 青木正夫他日中連合民居調査団編：党家村—中国北方の伝統的農村集落、世界図書出版公司、1992.3
- 4) 劉致平：中国居住建築簡史、中国建築工業出版、1990
- 5) 隆昌雲頂寨史料、1989
 - ・韓城県誌
 - ・馮光波：韓城の寨子状況と沿革、韓城文史資料彙編、第7号、pp.102～104、韓城文史資料研究委員会、1987
 - ・王文学他：土峪村史、1989.10

<研究組織>

主 査	青木 正夫	九州産業大学工学部教授
委 員	上和田 茂	九州産業大学工学部教授
〃	船越 正啓	九州産業大学工学部助手
〃	鈴木 義弘	大分大学工学部助手
〃	周 南	九州大学大学院修士課程
〃	張 光	西安建築科技大学外事弁公室主任
〃	周 若祁	西安建築科技大学建築系教授
〃	邵 曉光	西安建築科技大学建築系副教授
〃	劉 燕輝	中国建築技術発展研究中心 居住工程環境研究所副所長
〃	劉 東衛	中国建築技術発展研究中心 村鎮計画設計研究所設計室主任
〃	陳 維敬	韓城市人民政府建設局
協力者	上田 博之	兵庫県立人と自然の博物館研究員
〃	王 平易	西安建築科技大学建築系副教授
〃	張 樹平	西安建築科技大学建築系講師
〃	王 兵	西安建築科技大学大学院修士課程